

## かみ れい どう い せき 上礼堂遺跡

所在地／西白河郡泉崎村太田川字上礼堂

上礼堂遺跡は、泉崎駅より北西部に位置し、隣接して西側は白河市と界する。標高400m程の丘陵が発達し、丘陵内では標高310m代で多くの谷が入り組んでいる。この丘陵と北側を現在の国道4号線が東西に通過しています。

遺跡の存在は昭和27年に確認されていましたが、村では中核工業団地造成工事と併行して、平成4年4月～6月にかけて大規模な発掘調査を行ないました。

発掘調査の結果確認された遺構は、堅穴式住居跡35軒、土壇跡12個、溝跡5条で、このうち堅穴式住居跡19軒、土坑跡8個、溝跡3条について調査し、残りは中央より北側にあるため現状のまま保存してあります。堅穴式住居跡は一辺約4～6mの方形平面の形です。土坑も8個調査されましたが、土坑は、「墓」については「土壇」と書き、それ以外

の穴については「土坑」と書いて区別しています。今回発掘された1個は墓と考えられますが、他の7個についてはそれ以外のものと思われる。特に7号土坑については、巾約1m、長さ約1.4m、深さ約50cmの長方形をした土坑で、内部からは土器を含む黒色のコーラル状有機質のかたまりが埋積されていました。

遺物は主に堅穴式住居跡からのものが多いが、須恵器・土師器・灰釉陶器などの土器類が400点以上、鉄製品では小刀・鉄鏃・刀子・鋤先などがあり、その他勾玉・小玉・古瓦片などが出土しました。特に土師器では墨書土器（土器の表面に墨で字を書いたもの）に、「大家」「工」などの文字があります。さらに古瓦などがある点は、一般集落とは異なった、「公」の集落と推定できます。

これらの住居跡は出土した土器から、6世紀（古墳時代中期）頃から7・8世紀頃までの奈良・平安時代までの集落と考えられます。特に灰釉陶器・古瓦の出土するところから一般集落とは異なった役所、または寺院などに関係した集落と推定できます。



復元作業中のようす